

いまと、 これから。

いまとこれからの
とつとりの
ための
ボランティア
地域づくり・
NPOを考える
情報誌

誰かの体験を生きる、
ドキュメンタリーの回し読み。

[特集]



いまと、 これから。 CONTENTS

【特集】

- 加瀬澤充監督にドキュメンタリー映画について聞く。..... 4
- 学生によるドキュメンタリーの回し読み。..... 8
- もっと知りたい・関わりたい人のための
鳥取の映像に係る組織のご紹介 12

【ミニコラム】

- ・今日も、つまみぐい。..... 13
- ・いま、これ、ぶっく。..... 13

【高校生 ing】

- ・JK 課 e スポーツ部始動 次への挑戦 14

「牧師といのちの崖」2018 年、100 分

監督・撮影・編集 加瀬澤充

◎映画の舞台は和歌山県白浜町。観光名所の三段壁の崖の上には「いのちの電話」と書かれた看板が立っている。記された電話番号の先は近隣にある教会の藤藪牧師の携帯電話。自殺を図ろうと崖に訪れた人からの電話を受けて、牧師は夜道に車を走らせ保護に向かう。死の淵ぎりぎりで発せられた「助けてください」という生の声。保護され共同生活を送る人々と、自殺志願者が再び社会に戻れるようにと活動する牧師の日々を追った作品。日本の自殺者数は年々減少しているとはいえ年間 2 万人を超え、中でも若者の死因では第 1 位となっている。映画は私たちに、生きにくさを生み出す現代社会の問題を突きつける。

【感想】

倉敷市で開催された「いのちを支えるフォーラム」でこの映画を観た。登場するのは人生に絶望して自死を選ぼうとした人たちと救おうとする牧師。もう一度生きていきたいと思えるには何が必要なのか。悩み、疲れ、それでも向かい合っていく藤藪牧師の日々を観た。人はなぜ孤独なのか、人はなぜ自ら死を選ぼうとして、そして人はなぜ人を助けようとするのか。ある人には複雑で、ある人には単純な世界が生き辛さを作り出しているのかもしれない。それでも、私たちは確かに存在している。知らないだれかに助けられた経験があるように、日常の小さなやり取りの中で隣のだれかを助けられる日がくるかもしれない。わからない世界を観ることは、それを撮る監督のわからなさや苦しさを体験することに思えた。わからないことだらけのこの世界だから、世界を決めつけるのはいつでもまだ早すぎる。(池淵菜美)

み。

世の中には知らないことがたくさんあつて、知らない場所を訪ねたり、違う仕事をする人と話すことで、そこにある事実と驚くことがある。もっと多くのことを知ることができて、もっと多くのつながりを理解できれば失敗ももっと減らせるかもしれない。



[特集]

誰かの体験を生きる、 ドキュメンタリーの回し読

れないし、人に迷惑をかけるようなことも減るかもしれない。そして、先の人生について考えるときの選択肢も広がるかもしれない。だけど、一日は24時間しかないし、そんなに遠くには頻繁にはいけない。何より他の人が考えていることを知ることはエスパーでもなければ難しい。

そんな時に家に居ながらにして経験値を増やせる方法の一つがドキュメンタリーを観ること。「そこに起きていること」「ある人の目線から観る」。遠くの場所におきていることや身近でも自分とは違う仕事や考えを持つ人たちの日々を観ることが出来る。そこには誰かが考えた物語よりも物語があったり、SFよりも衝撃の真実が映っていることもある。「事実が小説よりも奇なり」といいますが、そこには喜も希も吉もあるかもしれません。今回はそんなドキュメンタリーを通じて、いまとこれからを考えてみます。

ドキュメンタリーもフィクション。

加瀬澤 この映画（『牧師といのちの崖』）を撮っていたの僕の中で一番の気づきは、崖に来る人たちは「生きたい」人なんだということでした。このように気づく前と後では世界の見方が違ってくるような事がドキュメンタリーの現場ではよく起こります。言葉にすると割と単純なことです。実際に体験するとそれ自体が大きい小さいに関わらず衝撃的です。実際の現実を前にしたことで思考がステップアップしていくというのを作業として繰り返し、その中でまた撮りながら考えていく。このプロセスがどんどん形に落とし込まれていく。映画を観る人はそれを再体験する形になると思うんですね。しかし観る人と作っている僕は違う人間なのでその他者がぶつかりあって、新しい何かが思考として刺激されて、また考えてというようなことが、ドキュメンタリーではできていると思います。僕は就職活動中に是枝監督のドキュメンタリーを観て、この世界に入りました。是枝監督はもともドキュメ

ンタリー出身なんです。NHKスペシャルだったかな、新しい記憶がどんどん消えていってしまう病気の方とご家族を取材しているのですが、その方は以前に取材されたことを忘れてたりするわけですね。そういう過程の中で監督自身が「記憶とは一体何か」と考えるようになり、それが観ている側にも伝染するのを体験して、あ、これは面白いな、と思ったんです。作り手によって一つの映画が作られるのですが、観る人の中でもう一つ誕生して完結すること、そこに人それぞれのドキュメンタリー像があることに面白さを感じたんです。

編集部・石原 なるほど。極端に言えばそこが寒いのか暑いのか、とか、空気が乾いているのか乾いてないのか、うるさいのか静かなのか、みたいなことを含めて完璧には観ただけでは知り得ない。当然切り取った場面であるからその前後に何を言ったのかということでも違ってくると思うし、そういう意味では、切り取られたものをまた観る側で咀嚼して、再構築しているんなものを脳内で補完して、自分の中で完成する感じですね。

しかし、ドキュメンタリーと言っても監督によってもだいぶ違いますよね。マイケル・ムーア監督と森達也監督では全然違う。森監督の『FAKE』を観たんですが、加瀬澤監督の作品はこちらに近いかなと勝手に思いました。対象に向かい合っているその距離感とか、観ている自分が疑似体験をしている感覚が近かったというか。

加瀬澤 ドキュメンタリーと言ってもいくつかの方法論のようなものがあります。想田さん（想田和弘監督）や森さんは現実世界である事象を観察して、そのことからまた生まれてくるものを思考しながら撮っていくというタイプの人たちだと思います。一方でマイケル・ムーア監督などは伝えたいメッセージがくつきりしていて、それを伝えるために映像素材を活用していく。ドキュメンタリーもフィクションなので、何をピックアップしていくのかによってその世界観の作り方は全く変わってきます。ただいずれにせよ、現実そのものを見せているという感覚はないですね。完全にフィクションで、人の数だけ主観がある。それぞれの監督が持っている世界の向き

合い方によって変わってくる。もしかしたらフィクションより多様かもしれない。

石原 監督は映像を撮っている時に、観るお客さんを想定していますか。劇映画であれば、例えば夏の子ども向けとか、そういう一定のお客さんが想定されていて、その客に響くように撮るじゃないですか。

加瀬澤 今回だと、僕にドキュメンタリーを教えてくれた「佐藤真さん」という映画監督に見せたいと思って作りました。佐藤さんが自死で亡くなって、それで撮りはじめたという経緯があるので、かなり個人的な思いです。もちろんそのことばかりずっと考えているわけではなくて、例えば劇場で見せるときに、どういうサイズで撮ったら人に伝わるだろうとか。テレビで見ると、割とぐっとアップで撮った時にすごく伝わるものもあるけど、スクリーンで見たときにはもうちょっと引いた方が伝わりやすいとかそういう技術的なことも考えていますけど、ただ最終的には、佐藤さんに一番見せたいと思って作っているところはありますね。不特定多数の誰かではなくて。

加瀬澤充監督

ドキュメンタリーというジャンルの映画はその時代時代の新たな事実や社会的に話題となったこと、事件となったことなどに新たな光を当てたり、問題提起をしたりと劇映画よりもそのメッセージ性が注目されることが多い。では、その作り手であるドキュメンタリー映画の監督は何を考え、映画を撮っているのか。初の長編ドキュメンタリー作品『牧師といのちの崖』を発表された加瀬澤監督に編集部がインタビューしました。

聴き手 石原達也、池淵菜美

特集：誰かの体験を生きる、ドキュメンタリーの回し読み。

ドキュメンタリー映画について聞く。

観る人を宙ぶらりんの状態に保つ。

石原 観る側の力に左右されるところがあるかなと思いました。今回の作品でも、例えば厨房でのやり取りの場面とか、どう思うか人によって変わりそうというか。

加瀬澤 そうですね、それはあえて意図的に観る人を宙ぶらりんの状態に保つということをしています。

石原 植木鉢のくんだりとかも訳がわからないですよ（笑）。

加瀬澤 それよく言われます（笑）。

石原 わからないと思ったけど、あの場面での藤藪さんとみんなの距離感とか、あの空気感が必要だったんだなと。観終わった後に思いました。

加瀬澤 そこに流れる時間だったり、空気感みたいなものが映画を見ていて伝わる瞬間があると思うんですよ。それはかなり意識して作らないとなかなか伝わらなくて。エリック・ロメールという監督の『緑の光線』という映画があるんですが、これは彼氏がいないまま一人でバカンスに出かけていった女性のある種の不安な気持ちみたいな空気感が伝わってくる。言葉として解釈できる映像をあえて壊して観てもらおう、そうすると日常的な空気が、映画からふっと流れてくる時があるんですよ。

編集部・池淵 言語化できない空気感を身体的に体験するんですね。

加瀬澤 そうですね、身体的な何かを作るための方法だと思えます。例えば10秒でもいいものを、30秒に引き延ばして入れ込むと、かなり不思議な状況が生まれてくるんですよ。なんでこれを見せられてるんだろう、この時間はなんだろうっていうある種の別の意味として解釈できるものだけじゃない世界も広がってきたり。

石原 同じ映画を観ても、瞬間的にいくつものメッセージを受け取る人もいれば、見てるときに受けとめるものと、見終わった後に受け止めるものが違うというタイプの人もいるし、受け止めない人もいるだろうし、自分で選んで、受けとめないって人もいるだろうし。自分側の成長や理解度によっても受けとめられるものがすごい変わったりする。年齢を重ねると受け止められるものが違うとか。

加瀬澤 人間もいろんな多面体として生きていますからね。分かりやすいものが求められている傾向は多分あるんだとは思いますが、ただ、求められるものがそうだったとしても、自分の中にもいろんなところにいるんなチャレンジをしたいと思っています。この雑誌（『いまと、これから。』）も多様性があつて面白いですよ。これを読むと同じように感じるんですが、実際に自分が生きて感じた中から生まれてきたテーマに向き合ったことによって次のテーマが立ち上がってきたりとか。そういうものを拾いながら作っていくの

が魅力的な作業で。こう自分の人生を生きていくのと同じような形でドキュメンタリーを作っていきたいとずっと思っているんです。池淵 『いまと、これから。』を出すまでには結構いろいろ考えたり、悩んだり、へこんだりしています。でもやっぱり、その中で次のテーマが立ち上がってくるというのはわかります。

監督になるまでと作品を撮るまで。

加瀬澤 僕は大学卒業して就職活動中に是枝さんの映像に影響されてテレビの制作会社に入ったんだけど1年で倒産してしまって、それで映画美学校のドキュメンタリーコースに入ったんです。それを主催していたのが佐藤真さんでした。先生は当時『A』を撮っていた森さんとか是枝さんとか。バイトしながら週に1回とか2週間に1回とか通っていたんです。同じ時期に世田谷区で活動していた園舎と園庭がない幼稚園のドキュメンタリーを撮っていました。30人くらいいた園児の中に、はやくんという自閉症の子がいて、その子がいることで子どもたちいろんな感情が生まれるんですね。子ども以上にお母さん同士の感情の揺らぎとか。そのことをドキュメンタリーを通して見つめるということをやっていました。それから佐藤さんの

現場に連れて行ってもらったり、諏訪監督の助監督をしながら今の会社、ドキュメンタリー・ジャパンに入りました。この会社ではテレビの仕事としてドキュメンタリーを撮ったりとか歴史の番組を撮ったりとか。そんな中、2007年の9月に佐藤さんの自死の連絡を受けて。電話をもらった時のことをよく覚えているんですけど、なんかどうしたらいいのかわからない。そこから自分のモヤモヤが始まった。やっぱり撮ることを通じて考えなきゃいけないかなという気持ちが大きくなってきて、「いのちの電話」の活動をしている藤藪さんに連絡を取りました。その時はテレビの番組内での取材だったんだけど、それだと解決しない。自分の中で消化不良みたいになって。佐藤さんが映画として思考していたものを映画として答えなきゃいけないっていう気持ちがあつたんだと思うんです。それで2012年から長編のプロジェクトとして始めることにしました。公開したのは2019年の1月です。

石原 今回の作品だと映画としてどう終わるかというのが想像つかないんですが。初めから終わりを想定するということは難しいにしても、どう決着つけるかというか。

加瀬澤 終わりはけっこうね、予感としてくるんですよ。この風景はどこかで撮ったところがあるな、これは一回見たなっていうようなのがだんだん自分の中で重なってきて、これはもうそろそろ終わりなんじゃないかとい

「次い、複雑さだったり豊かさだったりを見つけて欲しい。」

そこからまた世界を再発見して欲しい

加瀬澤 充

1976 年生まれ。大学卒業後、番組制作会社に勤務した後、映画美学校で佐藤真に教えを受ける。佐藤の指導のもと園舎と園庭のない幼稚園の自主ドキュメンタリー「おおぞら」を完成させる。2002年にテレビドキュメンタリーの制作会社、ドキュメンタリージャパンに参加。「オンリーワン」(NHK BS-1)、「森人」(BS 日テレ)、「疾走！神楽男子」(NHK BS- プレミアム) など、数々のドキュメンタリーを演出する。『牧師といのちの崖』は初の長編作品。

うのがだんだん、感情として生まれてくる。でもそのためには、自分の中の葛藤、まだこの風景は見えない、これは撮ったほうがいいんじゃないかっていうのを一個一個つぶしていって、そうすると終わりがなんとなく立ち上がってくるという感じです。

池淵 すっきり終わるという感じではないですよ。

加瀬澤 すっきりはしないですね。特に今回は思考が続いています。思考は続いていた方が、開かれている感じがしますね。

どう観てほしいか。

石原 そんな中で、今後どういうものを撮りたいですか。

加瀬澤 『牧師といのちの崖』の中で見えてきた世界をもう一歩先に進めた、そういう事ときちんと向き合って、さらに生につなげていく何か、を見つめてみたいなと思ったり。そのあたりを考えてみたいなと思います。

石原 考えてみたいということは、ある意味でいうとやっぱりわからないというか、なんで死ぬことを自分で選ぶか分らないとか、そういうものを自分なりに考えるというか、

加瀬澤 そうですね。そのとおりです。分からないから撮りたくなってしまうんですね。自分の中で多分いろんな事をわかったつ

もりになつてと思うけど、その中でやっぱり引つかつてるのは、このわからないことをどうしても知りたいって気持ちでカメラを向けさせるモチベーションになると思いますね。

池淵 今回、大学生にドキュメンタリー映画を観て感想を伝えてもらうという企画をしています。若い人たちにどんな風に観てもらいたいというのはありますか。

加瀬澤 我々が生きている目の前の世界は、非常に複雑で豊かで色々な価値観があつて、それを僕の映画では僕のフィルターを通して提示しているんですね。そこからまた世界を再発見して欲しい、複雑さだったり豊かさだったりを見つけて欲しいです。

石原 監督の一番好きな映画は何ですか。

加瀬澤 時期によって違いますけど、王兵(ワン・ピン)という監督の『鉄西区』という映画を今回の映画を作るのに参考にしました。10時間くらいある映画なんですけど。工場地帯が、変貌していく様子をじっと見てるんです。それが瞬間にすごく物悲しかったり、すごく美しく見えたりするんです。あとは佐藤真さんの『阿賀に生きる』。新潟の水俣病を撮った映画で、それもある空気を捕らえようとした作品です。



「ドキュメンタリーが映す今」は今の20代にどう映るのか。鳥取大学地域学部の学生さん約50名に9本のドキュメンタリーを観て「紹介文」と「感想」を書いてもらいました。冒頭の「紹介」は複数の学生さんが書いたものから一つを選び、後半の感想は全員分を掲載しています。どの学生さんが「紹介」を書いたのかも推理しつつお読みください。

【ご紹介する9本の作品】

- ・BOOKSTORE — 移住編 —
- ・じゆう劇場の瞬き
- ・スーパースイズ・ミー
- ・ハーフ
- ・マイケル・ムーアの世界侵略のススメ
- ・海は燃えている
- ・イタリア最南端の小さな島々
- ・風の波紋
- ・毎日がアルツハイマー
- ・夜間もやってくる保育園

「BOOKSTORE — 移住編 —」

出演 森哲也

監督 中森圭一郎

◎大学生にぜひ観てほしい作品。この映画を観て私はそう感じた。これは、自分の本屋を開こうとする一人の男性の奮闘する姿が描かれている。東日本大震災をきっかけに東京から鳥取へやってきた彼

は、本屋をつくる上で必要となるさまざまなことを自ら経験していく。地元の人々と日常的な関わりを持ちながら、目標に向かって挑戦を重ねる彼の姿は、特に自分の好きなことを追求できる私たちが大学生に「あるべき姿」を示してくれているような気がする。「自分のやりたいことをする」とはどういうことか。この作品を観て考えてみるのもいいかもしれない。果たして彼の夢である本屋は完成するのか、意外な結末にも注目してほしい作品だ。

【感想】私はこの映画を視聴する前、本屋の日常を描いた作品であると思い込んでいました。実際は本屋を開くまでの過程を描いた作品であつたため、始めから意表を突かれました。森さんには、非常に行動的であるという印象を持ちました。本屋を開くだけでなく、農業やリヤカーづくりにまで取り組もうとするなど、到底真似できそうもありません。開店後の様子も気になりました。／森さんの暮らしを通して、「非日常」を感じることができた作品だった。何かに縛られることなく自分のやりたいことを追求する森さんは、大学生の私と似た環境にあると思えたが、森さんの生活は私の知らない世界ばかりだった。学校外が学び舎という森さんの言葉から、学校だけでは身につけることのできない力もあるということ、それを養える場所が地域の中のあるゆる場所に存在しているということに強く感じた。／主人公である森哲也さんは本を採るために京都まで古本祭りに行ったり、自給自足のために耕作放棄地を利用し農業をしたりと、自分がやりたいと思うことに対して、何事も挑戦

されていて、とてもカッコいい大人だなと私は思いました。そして私も、最初から失敗を恐れて諦めるのではなく、何事もまずは挑戦するという気持ちを大切にしていきたいと感じました。／関東からはるばる鳥取へやって来た森哲也さんが、自分の夢である本屋を作り上げるために自給自足の生活をするドキュメンタリー映画。印象に残っている場面は、自分で木材などを集め、生活に必要な物を作っている所である。DIYが得意で自給自足をするにあたってとても優れている部分であると感じた。また、一人で生活するので色々な人と関わりながら人との繋がりも見ることができた。／この作品を鑑賞して、夢や目標に向かって努力することの素晴らしさやその夢を協力してくれる人の暖かさを感じた。本屋の開店を目指す森さんは、様々な課題に直面しながら、試行錯誤して乗り越えようとする姿に感動した。また、森さんの明るい人柄で鳥取の人達と仲良くなっているいき、本屋を開くことも応援してもらっている場面では、人の優しさを感じられた。

「じゆう劇場の瞬き」

監督 山崎樹一郎

◎今の社会はいわゆる「健常者」と「障がい者」との間に明確な線引きがあり、あたかもこの世の中には「健常者」しかないかのように創られているように思う。そのような世の中を変え、自分たち障がいを持つ者のことも知ってほしい、共に暮らしていきたいというメッセージ

の込められた作品ではないかと私は解釈した。それぞれの特性を生かした指導を行おうとする指導者、お互いを認めつつ楽しそうに練習をする人々。このような風景から感じ取れることは各々まちまちだろうが、まずは障がいを持つ人について知り、存在を認識することが共生社会への第一歩となる。今までの生活から一歩踏み出す機会と新たな考えを与えてくれる作品だ。

【感想】この映画を見たときの一番最初の感想は楽しそうだったということである。この映画の中で演劇に携わっている人すべてが、はつらつとして演劇に取り組んでいる。障がいを持っていてもいなくても非常にストイックに演劇に取り組んでおり、本当に楽しそうだと感じた。これが一つのあるべき姿なのではないかと感じることのできた映画だった。／障がいを持っていてもいろいろな特性を持っている、こんなにも生き生きと演劇を楽しむことが出来るんだ、というのが最初の印象だった。普段障がいを持つ人々がどのような生活を送っているのか知らなかったが、彼らの練習風景から「楽しそう」「私も混ざりたい」という感想がこぼれ出てきた。演劇は多様な人々を結び付け心通わせることのできる優れた方法の一つだということを再確認した。／ドキュメンタリー映画「じゆう劇場の瞬き」の中で印象に残っていることは、出演者の楽しそうな顔と演技である。障がいのある人、健常者が一緒になって稽古をしていたが、楽しそうに演じている両者に何の差異があるのだろうか。出演者の思ったままのじゆうな演技とありのままの笑顔は白黒の舞台の中で輝いてお

り、夜空を照らす星のように感じた。／この映画の中で最も印象に残ったのは監督の「幸せは人それぞれ違う」という言葉だ。この言葉は、脚本の登場人物に向けてのものであったが、私は本映画に登場する役者に向けての意味に捉えた。障がいのある方と一緒に一つの劇を作り上げるといふ風景の中で、一つ一つの動作を全力で、そして楽しそうに生き生きと演じている姿がとても印象的であり、この姿が監督の言葉に色濃く表れていると感じた。／監督さんが否定したりせずそれぞれが思い思いに表現することで演技に個性が表れて良い味が出ていた。障がいのある人という人が一緒に演じることでお互いの知らなかったことを知り、見る目が変わってくるのではないかと考えた。じゆう劇場が自分を出せる居場所となり、劇を通して個性を見出し自分のことも知ることができると良い影響を与えていると感じた。／監督の何でも受け入れる姿がとても印象に残っている。障がい者ならではの、突拍子もないアイデアや動きに対して、否定することなくすべて一度受け止め、それを活かしたり正しい方向へと導いたりしている姿に感嘆した。また、じゆう劇場という場所によって居場所ができ、いきいきとしているように感じた。障がいがある、なにも関わらず、劇をよいものにしようともがく姿が目には焼き付いている。

「スーパーサイズ・ミー」

監督 モーガン・スパーロックス

◎2002年、アメリカで起きた一つの訴訟。「私たちが太ったのはファストフードのせい」と主張する少女2名。肥満の原因は本当にファストフードなのか。もし、1日3食1か月間食べ続けたら人間はどうなるのか。この問いに監督自らが体当たりで挑む。ルールは4つ。某ファストフード店のメニューしか食べてはいけない。勧められたらスーパーサイズ。全メニュー制覇。3食欠かさず食べる。前代未聞の過酷な実験の幕が上がった。過剰なカロリー摂取で壊れていく身体と心。インタビュで明らかになる食事の偏り。次第に暴かれるアメリカ食文化の間。現代食文化に警鐘を鳴らす人体実験ドキュメンタリー。

【感想】馬鹿げている、正気の沙汰ではない。ファストフードを食べ続け、運動をしなければ太ることなど常識だ。それを実証するためにこの挑戦をした監督は頭のねじが外れている。見ているだけで胸焼けしそうな巨大バーガーとドリンク。それらが日常風景になっている背景に米国食文化の間を垣間見た。ファストフードは美味しいが、ほどほどにしよう。／ファストフード好きの私にとって、この作品はかなり衝撃的だった。なぜならファストフードが持つ中毒性と集中力と思考能力の低下など多くの問題を引き起こし、思わずソツとしたからだ。そのような食べ物ばかり身体によくないことはひしひし理解してもそこまで影響はないだろう、まさか自分が…なんて思う自分かいたので今回の視聴で恐ろしさを身で感じた。／1ヶ月マクドナルド生活をすると、身体に悪いとか太るというようなことはもちろんだが、幼少期の良い食

習慣によって良い食事を選択できるようになることなどの食の教育が大切であると感じた。食べることが好きで、マクドナルドという身近なファストフードを取り上げていたため、興味がわいて見ることになったという単純な動機だったが、大切なことを考えさせられる映画だった。／私は、スーパーサイズミーを視聴して被験者の実体験から、人は食事次第で生きること死ぬこともできることを理解した。自分の食生活を振り返って、少なからずこれと同じ影響を体に及ぼしている部分があることを否定できないことから、被験者と自分を照らし合わせて当事者意識を養う必要があると考えさせられた。スーパーサイズミーは、視聴者に、食生活の危険性という観点で、警鐘を鳴らす作品であると感じた。／マックスは私にとって小さい頃から土曜の昼にたまに食べている身近なものです。小さい頃はハッピーセットのおもちや欲しさに買った記憶もあります。この映画を見くファストフードは健康に悪いという印象は変わらないけど、子どもが欲しいと思う魅力たっぷりのものが詰まっている、小さい頃に身についた習慣や食べたものによってずっと続くものだなと思いました。／ファストフードが健康に悪影響を与えるというのは予想できるが、その他に消費者の健康への意識の低さとマクドナルドによるポップなイメージ戦略が映画の中では綴られていることが興味深かった。ファストフードに限らず外食する際には店の前で一度立ち止まって身体のことを考えてみるのがよいだろう。

「ハーフ」

監督 西倉めぐみ、高木ララ

◎人と違って何が悪い。日本では2万人以上、49人に1人の割合でハーフの子どもが生まれている。グローバル化が進んでいる証拠だ。しかし、周りの環境はどうだろう？ グローバルとしたいながら日本語のみで生活できしてしまう日本がここにある。この映画では、2国間の立場で揺れ動くハーフたちの日々の葛藤・生き方がありのままに描かれている。彼ら5人が心に秘めた叫びをじっくりと聞いてほしい。彼らは、複雑な思いを持ち、日々を生きている。今の日本社会が彼らにそう思わせている。彼らが親世代になる時には、また新たなハーフが生まれるかもしれない。生きづらい社会ではなく、誰もが心のままに輝ける社会へ。あなたの価値観が必ず変わる映画だ。

【感想】そもそもハーフという言葉を使っているのは日本だけで、日本特有の概念であることを初めて知った。このような背景から日本は別物を区別し、どちらかしか受け入れないという現状がわかる。違うことを嫌うのではなく、いろいろなことを受け入れ、自分らしさを表現することが当たり前の日本にしていけるべきではないか。この映画を見た私たちが変えていけることもあると感じた。／私は当事者としてこの映画を観ました。観てみるとこんなこともあったなと思えるような共感する場面が多々見られました。そして改めて「ハーフであること」、この一つの事実がその人の人生に与える影響は大きいものであると考えさせられました。

す。周りの環境によってその人の人生はいい方向にも悪い方向にも転びうる。そのように強く感じました。／一日に何回も「日本人らしい」という会話、一年間で何回もする自己紹介など、日本人同士の間に生まれ、日本で育ち、外見も国籍も日本である人には分らない感覚だと思いました。だからこそ、彼らは「自分」というものを見つけた、見つけざるを得ないのかと思いました。ハーフである本人はもちろん、その親も一緒に悩んでいる姿が描かれていました。しかし、親が心配しているよりも本人たちは自分が何者なのかと向き合い、受入れているようにもみえました。／自分は何者か。このハーフを通して、2国間の狭間で生きづらさを目の当たりにした。あなたは日本人じゃないと言われ、学校で居場所を失ったアレックスが印象に残っている。人は認められてこそ輝き、成長していくのになあと思った。つい最近私の友達の1人がハーフであったと知った。少し驚いたが、その子との関係は特に変わっていない。私はその人の国や外見ではなく、その人の内面を見て関係を築いていきたいと思う。／印象に残ったのは韓国と日本のハーフである女性です。彼女の母親は彼女のことを想い、韓国とのハーフであることを隠していました。「お国柄」という言葉がありますが、国名は人柄まで決めてしまうのでしょうか。自分とは異なる人がいた時、なんとなく色眼鏡で見してしまうことには心当たりがあります。この映画は「違い」の先にある、その人自身を見つめるという当たり前大切なことを教えてくれました。

学生によるドキュメンタリーの回し読み。

「マイケル・ムーアの 世界侵略のススめ」

監督 マイケル・ムーア

◎あなたは、侵略と聞いてどのようなことを思い浮かべるだろうか。この映画のあらすじはアメリカ人のマイケルムーア自身が米軍となって一人で他国に侵略に行くというものである。この映画という侵略とは、武力によるものというよりは情報を盗み、自国へ持ち帰るというものである。そのため世界に興味があり、今何が起きているのかを知りたい人には強くお勧めできる。その他にも笑いどころが多いため、面白いドキュメンタリー映画が見たいという人にもおすすめである。この映画の見どころは二つある。一つ目は、世界各国のユニークな取り組みを知れることである。このような取り組みを見て、なぜ日本でこれが実現されないのかを考えてみるのも面白い。二つ目はラストシーンである。この映画のあらすじは、前述のように情報を盗み自国であるアメリカに持ち帰るというものである。しかしラストでは、その内容を覆すような内容が待っていたのだ。これに関しては自分の目で確認してみたい。

【感想】一つの国だけをみるとそこに足りないものはたくさんあります。しかし、世界全体でみると互いに補うように優れた仕組みがたくさんあるということがわかりとても勉強になりました。働き方や教育のこと、時がたっても現在に通ずるところが多くあると感じました。また、各国の制度の話が多く出てくるのにもかかわらず、雰囲気は堅苦しくなく、面白おかしく鑑賞することができました。／マイケル・ムーア

とができました。／マイケル・ムーアの世界侵略のススめを見て、特に印象に残ったのは、ラストシーンのアメリカにすべての取り組みの源流があったという点である。この映画では、世界中の状況と同時にアメリカの現状も知ることができる。これを見ていとも源流がアメリカにあったとは思えない。しかし、歴史をさかのぼることとそれに気づくことができたのである。私はこの映画を見て世界の情勢を知るといっても、アメリカを見つめなおし、アメリカに対しての印象が大きく変わったように感じた。／この映画はアメリカ人の視点で作られていたが、私たち日本人から見ても手本にできることがたくさんありました。私に特に印象に残っていたのはドイツ人の学生の言葉です。彼はドイツ国民として祖先が行った良い事も悪い事も背負わないといけないと話していました。どの国にだって良い所と悪い所があると思います。自分の国をよくするためにはまずそれを知ることだと感じました。／今回の世界侵略では人への気遣いを感じた。紹介された制度を、一つの国ですべて取り入れることは現実的ではないし、制度の裏側で、起きていることには触れられなかった。だが、どの国の制度も人を人として大切にしているという印象を受けた。ごく単純なことかもしれないが、そういったことを具体化している国々なのだろう。また、登場しなかった日本についても考えさせられた。

「海は燃えている」

～イタリア最南端の小さな島～
監督 ジャンフランコ・ロッジ

◎「移民問題の深刻さにショックを覚え、言葉を失った」この映画を見たとき、私の心には大きな衝撃が走った。「移民がいるなら受け入れたい」「困ったときはお互い様！」と安易な考えを持っていた。まさかあのような形で移民が運ばれているとは思っていません。腐敗した移民の肉体を見て言葉が失う。作中では島の医師が移民を助けていたが、島で移民を受け入れるかどうかという葛藤が見ている自分にも伝わり、ショックを受けたり、ハラハラしたりと自身の感情がたくさん揺れ動く作品となっている。これからの自分の生き方なども考え直すきっかけになるような作品なためぜひ一度手に取ってみてはどうだろうか。

【感想】映画を見ているという感覚よりも、その場所に自分がまさに立っている、というような、臨場感溢れた映画だなと思いました。中でも、船から乗客が救出されるシーンでは、ドキュメンタリー映画ってこんな衝撃的な場面も映すのか、と驚きました。／このドキュメンタリー映画では、島の子が海の近くで遊んだり、老人が海でウニを取ったり普通の日常が描かれている。その一方でこの島の周りでは沢山の難民の人が船で発見されている。映像では、死体が山のようになっていて、たくさんの人が生きるために海で死んだ。これを見て同じ海の周辺でも全く異なる人生のストーリーがあることに衝撃を受けた。／穏やかな日常が流れる島に多くの難民が押し寄せることや難民船の救出など映画とは異なるドキュメンタリーであるからこそその本当の実状を知ることが出来た。私たちの生活では難民が押し寄せてくることも私たちは難民になることも考えにくい生活をしている。私たちは、難民問題など海外で起きている問題について何も知らないまま平和な日々を過ごしているのだと思った。／イタリアの島に住む住民と命がけで海を渡る難民の日常が描かれている。難民の悲しいニュースが島民の家のラジオから流れているにも関わらず、全く興味をもっていない場面から、両者の距離は近くても心は遠くにあるのだと胸が苦しくなった。私たちは毎日平和に生活しているが、何も知らずとせざるに目を背けていたのだと実感した。人間の命の重さや、生命を救うことの尊さについて考えさせられた。／私は、この作品を見て初めて移民問題の深刻さを目にしました。学校の教科書には生徒の心のことを考えてかききれない文章で淡々と描かれているため、あまり当時の情景を思い描いたり深く移民問題について考えようとは思いませんでした。しかし、この作品では移民がどういった状態だったのか、受け入れる側の葛藤が描かれていることで、もし自分が当時そこで生きていたらどうしていたかということまで深く考えさせていただけの作品でした。

「風の波紋」

監督 小林茂

◎とある里山の、のどかで平和な集落。ここでは地域住民が日々の生活を楽しく送っている。他地域から移住してきた小暮さん夫婦や松本さん夫婦。今では集落の一員として、暮らしをつくっている。地震で壊れた家の修復を東京から来たボランティアと一緒に、屋根の雪下ろしを地域おこし協力隊と協力して行う、そのような集落の日常

から私たちが感じとれるのは、地域の人々の「つながり」の強さだ。それほどまでに「つながり」の強さが生まれている理由はなんだろうか。この地域の風土特有の生活、それぞれの暮らしの濃密さなど、ドキュメンタリーでなければ観られない地域の様子を通してその答えは得られるだろう。

【感想】山村に入ったことのない私はそこで彼らが村という共同体の結びつきの中で生活し、彼らが育てた野菜や動物を自分自身で下処理して食し、最低限の機能を有した服を着て、茅葺の家に住み、災害の脅威に毎年おびえながらも幸せを享受していることを知らなかった。山村というだけで、同じ国の中でも生活はがらりと変わる。「風の波紋」は都会では決して味わうことのできない世界の一面を教えてくれた。／移住してきた人と野菜を一緒に収穫して共有したり、雪かきの仕事を協力し合ったり移住者を受け入れることや、「いずれはこの命も食材に変わるんだ」という背けることのできない事実を受け入れている。妻に住む方々は温かいというより人間として生きていく上でどうしようもできないことを受け入れているのではないだろうか。そんな風に感じさせられました。／新潟県十日町市で生きる、住民の方の様々な暮らしを見ることができました。映画の中で私が一番印象に残っているのは人々のつながりの強さについてです。映画の中で何度も出てくる、みんなが誰かの家のこたつを囲んでご飯を食べているという光景が特に印象的です。特別な日でもないのに家族でない人と同じ食卓につくということに、住民同士のある意味家族よりも濃いつながりがあるのだらうと感じました。／移住

者の小暮さんの生活の様子や、その中で地域住民の方々と関わる様子を通して、この集落がとても素敵な場所だと感じた。それは人々のつながりがとても強いからだと思う。移住者のような他者を積極的に受け入れる姿勢が強いこと。これは地域の産業の発展や人口を増やすためにも重要であるが、それ以上に、地域の中での人々のつながりを強めるためにも不可欠な要素だということに気づくことができた。／いつか田舎に移住したらこんな暮らしがしたいな。この映画をみて私はそう思いました。山菜採りや草木染め、かやぶきやね、広がる田畑。ここにしかない自然と共に生きる人々。皆でいろいろを囲み、大きな声で話すおじさんや手をたいて笑うおばあさん、照れ笑いする若者の姿。ここにしかない人々の愛あふれる空間。もしこの空間にお邪魔することができたなら、私もここに移住を決めてしまってもいいかもしれない。そんな風に感じました。

「毎日がアルツハイマー」

監督 関口祐加

◎この『毎日がアルツハイマー』は撮影者の母が、夫が他界してからアルツハイマーになり、その日常を描いた作品である。特にこれといった特徴はない作品であるが、日常会話や食べているもの、行動などが如実に描写されている点が見所である。医師からの診察結果を聞いているシーン、買い物をしていくシーン、『東日本大震災』での恐怖など日常を描写した作品ならではの空気が味わえる。何と云っても『東日本大震災』でのやりとりは見所である。自身という緊迫した状態の中でどのように行動したのか、その翌日はどのようなやりとりを行ったのか。家族との絶妙な空気感の中で行われる会話に注目。

【感想】私には認知症の祖母がいる。祖母は映画内の「母」よりも格段に症状が進行しており、ベッドの上からほとんど動くことができない。この映画を、そんな祖母の元氣だったころを思い出しながら見ていた。私の祖母は今、施設で生活をしている。私の祖母は私の顔などすぐに忘れ、会話もままならない。今ではずいぶん疎遠になってしまった。久々に、祖母に会いに行こうと思った。／この映画を見て私が感じたことは、家族という存在の大きさと。題材はアルツハイマー病だが、本当に伝えたかったことはアルツハイマー病の大変さではなく、病気を患いながらも毎日笑顔で真剣に家族に向き合っている大切さだと感じた。自分の家族が元氣でも病氣でも、近くにいてくれるだけで安心する。親が年を取った時寂しい思いをさせず、家族皆が家族でいてよかったと思えるように接していくことと思った。／私の身近な人にアルツハイマーと認定されている人はまだいない。しかし誰かアルツハイマーと診断されるかも分からない。自分もいつなってしまうかもしれない。誰かになってしまってもいいからアルツハイマーは正直怖いものであるが、この映画を見ることが出来てもし仮にこの先この問題にぶつかることがあれば避けて通るのではなくそつと寄り添おうと決めることが出来た。／この映画はアルツハイマーになった母の様子をホームビデオのように描いている作品である。そして、認知症への印象を変える映画でもある。一見認知症と聞くと悲観的な印象を覚える人が多いが、コメディのような日常が描かれている。この映画を見ることで認知症が辛い病氣ではなく誰しもがなる病氣で、その認知症への向き合い方でユーモア溢れる日常となると思われる作品だ。／私の99歳で亡くなった祖母（そうそぼ）もアルツハイマーであったが、この作品で登場する方は早い年齢でアルツハイマーに罹患（りかん）しているということに興味を持った。「言ったこと、言われたことを忘れてしまつた」という面がこの作品においては強く出てきているが、本人の「外に出たくない」という気持ちにも注目できた作品だ。「薬に頼りたくない」という本人の意見を尊重すべきだな、と感じた。／もしも自分の家族がアルツハイマーになったらということ深く考えさせられる映画だった。アルツハイマーになった母親の介護の撮影が続けた、ホームビデオでできたこの映画は、なんともリアルで大変な日常がいたたまれなかった。超高齢者社会に入った日本において、認知症は自分にとっても自分の家族にとっても、他人事では済まされない問題であると感じた。

「夜間もやってくる保育園」

監督 大宮浩一

◎このドキュメンタリーの舞台は題名の通り、夜間もやっている保育園で、新宿歌舞伎町に隣接する大久保で24時間保育を行う「エイビイシイ保育園」が主な舞台です。このドキュメンタリーの作中では、保育園で働いている保育士さんや子どもを預けている親御さんのインタビューが数多くあるのですが、夜間保育園に対して悪いイメージを持っている人とかいるんじゃないでしょうか。「夜遅くに子どもを預けるなんておかしい」とか。そういった考えを持っている人に対して私自身悪いイメージを持つとかは言えませんが、とりあえずこのドキュメンタリーを見てほしいと言えます。少なくとも私は夜間保育園に対する考えが変わりました。この「夜間もやってくる保育園」はそういったドキュメンタリーです。

【感想】「ここがないとやっていけない。」夜間保育園を利用する親たちが口をそろえて言っていたこの言葉が印象的でした。夜遅くまで働く親が安心して子どもを預けられる環境づくりはもちろん、アレルギー、安全性に配慮したオーガニックの給食へのこだわりは、保育園でここまでするのかと驚きました。一歩先を行く保育を知ることができて勉強になりました。／夜間保育園は共働きや一人で生計を立てていて必要としている人しか知られていない。仕事で保育園に預けているだけでなく、将来的に子どもの生活リズムを崩さないために預けている保護者の葛藤している声が印象的だった。夜間保育園は夜間の子どもの安全を守るだけでなく、親の相談する場所としても機能している。悩みを吐き出す場所を提供している。大人目線で保育園の状況や預ける親の気持ちに聞けて良かった。／私がこのドキュメンタリーを鑑賞して思ったことは、子どもを大切にしている親御さん達はカッコイイということだ。一見夜間ということ子どもを大切にしないと思ってしまうが、ドキュメンタリーに出演した親御さん達は、子どもを養うために昼も夜も働いている。だから預けざるを得ないわけで、このドキュメンタリーを鑑賞して「夜間に子どもを預ける」「子どもの為」ということが分かった。／作品では、夜間保育園を運営する人と夜間に子供を預けざるを得ない大人の心情が描かれているように感じた。夜間保育園は共働きの家庭や夜間勤務している家庭、シングルマザーなど様々な家庭にとってなくてはならない存在だと思った。認可夜間保育園は全国で80か所あるがまだ認知度は低い。家族の形や働き方が日々変化していく現代、夜間保育園の必要性はさらに高まっていくことが考えられる。／エイビイシイ保育園に通っている園児たちのとても楽しそうな笑顔が印象的でした。夜間も保育園に預けられたら、子どもたちは寂しくて泣くと思います。でも、園児の中に泣く子はおらず、むしろ笑っていました。それは、この保育園が楽しい場所だからだと思います。夜間もやってくる保育園は、夜間に働く親だけでなく、その親子を支える・笑顔にする場所だと思いました。／夜間保育園についてはあまりよく知らなかった。映画では、夜は家族と過ごす時間というイメージがあるからこそ、親たちの悩みや葛藤が描かれていた。しかし、子どものために仕事をしている親たちが夜間保育を利用することは子どものためにならないのだろうか。様々な家庭において子どもたち、そして親たちのもう一つの夜の居場所となり得る存在が夜間保育だと感じた。

現時点プロジェクト



代表者名 野口明生

<https://www.instagram.com/genjiten2017/>
genjiten2017@gmail.com

現時点プロジェクトは、2017 年 1 月にスタートした、生活習慣や生活用品、伝統行事や人々の記憶、自然環境などを映像や写真で記録し、公開することをメインに活動している集団です。

2018 年より取り組んでいる「私はおぼえてる」は、鳥取県中部の高齢者の方にその半生と暮らしてきた土地の記憶を語っていただくインタビューを行い、20 分程度の映像にまとめています。「あなたの人生は語り伝える価値がある」というテーマのもと、これまでに 80~90 代の男女 8 人の映像を制作・YouTube にて公開しました。幼少期や両親の思い出、生活や仕事の様子、戦時の記憶…。そこにあるのは英雄的なストーリーでなくても良く、一人ひとりがその人だけの人生を、この鳥取で生きてきたのだと感じられる映像シリーズです。

もっと知りたい・関わりたい人のための鳥取の映像に係る組織のご紹介

よなご 映像フェスティバル 実行委員会



代表者名 水野耕一

<http://yonagoeizofestival.org/>
<https://facebook.com/yonagoeizofestival/>
080-5232-2993(水野)

2008 年に立ち上げ。山陰地方での映像文化の発表の場・交流の場・情報発信の場であることを目標に、地方では観る機会の少ない個人映画・実験映画・ビデオアート等にも目を配りつつ活動しています。劇映画が小説だとしたら、個人映画は詩であり歌であり、時には武器といえるでしょう。そこにはメジャーメディアにはない孤独な心情の表現があります。年に 1 回の映像フェスティバルでは特集部門と一般公募部門の 2 本柱で、ドキュメンタリーやアニメーションの特集とともに、全国から応募されたインディペンデントな映像作品を紹介していきます。昨年は父上が江府町出身である森達也監督をお招きし、テレビ時代の作品から新作の披露、地元で制作されたドキュメンタリーまで盛りだくさんの内容で、多くのお客様にご来場いただきました。

まみじい。

今日も、

前回の梨あめの取材時に「今度さば寿司を作るからおいで」と言われたので、正直の頭に神宿ると、再び佐治町へ向かったのは十一月末のこと。正直に時間通りに到着した時には、すでに佐治の節子さんたちはせっせと働いておりました。大量の鷹の爪をハサミで輪切りにしている信子さん。大量の柚子をみじん切りにしている登志子さん。大量の冷凍山椒を解凍している厚子さん。大量の米を炊く芳江さん、八智恵さん。調理台の上には150本の塩さばの開きとその頭。このさば寿司作りには3日を要するそうですが、伺ったのは最終日。まさに佳境に差し掛かっていたのです。

てい
きます。
頭を入れること
で、味が出て風味が
増すのだとか。
これを何層にも重ね、桶の
上まで並べたらビニール袋で
密閉し、蓋を閉めて約1ヶ月
発酵させます。完成は年末。そう、
さば寿司は佐治ではお正月料理な
のです。だから完成したらまずは神
棚にお供えするそう。さば寿司、田作
り、鰹節、数の子などが海のもの。米、
みかん、串柿などが山のもの。にぎやかな
神棚に神様もきつとお喜びでしょう。
さて、作るころはしかと見せてもらいま
したが、完成したさば寿司を食べることは叶
いますかどうか。叶わぬときには神頼み。
余談ですが、さば寿司と同時に進行でいつのま
にか完成していた昼食をたらふくいただいた正直
者の頭には、神が宿りましたとも！
今回は、さば寿司と神様のお話。



その 10
「佐治町のさば寿司」の巻。

ヒーローズ (株)!!!

著者：北川恵海
出版社：KADOKAWA/ アスキー・メディアワークス
(2016/4/23)
ISBN-10: 4048659502 ISBN-13: 978-4048659505



仕事も生活もうまくいかない主人公が、「ヒーローをつくる」会社に就職して成長していく物語。誰かのためのヒーローを支える主人公も、知らず知らずのうちにその人のヒーローになっている。近い将来、自分はどうなっているんだろう。できればそんな風に誰かのヒーローになりたい。(石川莞汰・いしかわかんた)



Now, this, books

幸せな毎日

著者：米津玄師
出版社：Web 絵本



アーティストとして多くの楽曲を生み出している米津玄師の絵本。角を手放したカリブーは幸せと引き換えに何を失ったのか。強い感受性に苦しみながらも、それを失ったら自分でなくなってしまうかもしれない恐怖に共感している。(井上梓・いのうえあずさ)

沈黙

著者：遠藤周作
出版社：新潮社；改版(1981/10/19)
ISBN-10: 4101123152 ISBN-13: 978-4101123158



『沈黙』では、ポルトガル人宣教師が島原の乱後の長崎で目の当たりにした迫害を受ける島民たちと彼の苦悩が描かれている。どんなに信じて、神様は何も言ってくれない。信じるとはどういうことだろう。信仰とは何だろうと考えさせられた。(橋本悠生・はしもとはるき)

高校生ing

J K 課 e ス ポ ー ツ 部 始 動

次への挑戦

しらかわ かいと

白川海斗さん

日野町地元改革（JK）課 e スポーツ部

いまおか りょうた

今岡涼太さん

日野町地元改革（JK）課 e スポーツ部

今回お話を聞いたのは、日野郡を中心に活動する日野町地元改革（JK）課eスポーツ部の白川さんと今岡さんのお二人です。

どういった活動を行っていますか。

今岡：日野町地元改革（JK）課eスポーツ部に所属して、eスポーツを通して地域を盛り上げることを目的に2019年の5月から活動を開始しました。11月には主催のイベントを開催しました。イベントまでの半年間は運営などの参考にしようとして、他のイベントに参加したりしながら、準備を進めてきました。

白川：eスポーツとは「エレクトロニック・スポーツ」の略でゲーム機やスマートフォンなどを使い、ゲームで対戦するスポーツの1つです。競技人口は年々増えていて、現在では世界で少なくとも1億人を

超えるとも言われています。

活動に参加したきっかけは。

白川：2年生の時に職場体験学習で日野町役場に行きました。そこで日野高校魅力向上コーディネーターの長谷川大介さんにお会いしたのですが、趣味の話をしている中で、「ゲームが好きなら、それを活かして地域を盛り上げてみないか」と誘われたのがきっかけです。

今岡：僕は白川君から誘われたのがきっかけです。自分もゲームが好きだったので一緒に活動していくことになりました。

11月に開催したイベントについて教えてください。

白川：11月17日に日野町で「eスポーツを楽しむ！〜高校生と考えるeスポー

ツ×まちづくり」を開催しました。これが主催した初めてのイベントになります。当日は広島県や岡山県など県内外から約100名の方に参加頂くことができました。イベントでは、トーナメントとゲーミング交流会を実施し、参加者と交流を図りました。

イベントの感想を教えてください。

今岡：今回が初めての企画ということもあり、当初は本当に人が来てくれるのか心配でしたが、多くの方々の協力もあって大会が盛り上がり、また町外、県外の方にも日野町を知ってもらえたことは良かったです。

白川：ただ、イベントを通しての反省点も多くあります。大人の方に頼り過ぎた部分があったなと思います。イベント進行のこともですが、告知についてももっ

と自分達でも積極的に行えばよかったと感じています。

今後の活動について教えてください。

白川：当初ゲームが地域を盛り上げ、人の役に立ったりするとは思っていませんでした。ただ、今回イベントを通して、日野町に多くの方に来てもらい、そういった可能性もあるのだと感じました。次回の内容はこれから考えていかないとはいけませんが、江府町で「福祉×eスポーツ」をテーマにイベントを開催しようと考えています。

※「日野町地元改革（JK）課」とは地域を盛り上げること等を目的に活動している高校生。現在カレブプロジェクトとeスポーツ部の2つのプロジェクトチームがある。【参照：日野町地元改革（JK）課ガイドライン】



編集後記

力のある表現に出会くと、私たちは二度とそれに出会う前の自分には戻れない。現実が存在している場所と時間、現存する人の言葉や行動、その力に依拠して描かれるドキュメンタリーもそうだ。「様々な表現と出会うことで、私たちはより広く深く社会とつながることができ、それを変えることもできる」とあらためて思う。

毛利 葉

もう一つの編集後記「学生さんと特集記事」

※今回の特集は学生さんと一緒につくりました。

2019 年 10 月、鳥取大学地域学部ワークショップ入門を受講する学生約 50 名と初対面しました。今回私たち編集部と一緒に『いまと、これから。』を作ってくれたみなさんです。『BOOK STORE ～移住編～』というドキュメンタリー映画の監督、中森圭二郎さんにドキュメンタリーって何だろうというお話を聞いたり、鳥取県のグルメなどの情報を発信するブログ「とっとりずむ」編集長の酒本勇太さんに文章の書き方のお話を聞いたり、「いまと、これから。」のバックナンバーを回し読みして感想をシェアしあったりして、毎週金曜 90 分の限られた時間内ですが、約 3 ヶ月をかけて映画を紹介する記事の作成に臨んでもらいました。

(編集部)

映像製作や自主上映が縁となり、大学でドキュメンタリー映画について話をするようになった。自分も大学生のころにドキュメンタリー映画に触れるようになったので、何か恩返しのようなことができないかと思い、この大役を引き受けることにした。大学生にとって、今の社会はどんなふうに見えるのだろうか。授業で一緒に観た『クイア・アイ』でのマイルスを受け止めてくれた教会のような居場所はあるのだろうか。本当はそういう場所があればいい。でももしなければ、ドキュメンタリー映画でもいいし、小説でも、漫画でもいい。自分は一人ではないことを実感できるメディアと出会ってほしいと思う。

(中森圭二郎)

いまとこれからのとっとりのためのボランティア・地域づくり・NPOを考える情報誌

「いまと、これから。」 2020 年 2 月 29 日発行 (第 13 号)

発行：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人：齋藤明彦 編集人：毛利葉

取材・編集：池淵菜美、谷祐基、上山梓、三宅友紀子、三村稚賀、世瀬あけみ、尾崎可愛、足立みぎわ、石原達也

写真：市川貴美枝 協力：東根ちよ、中森圭二郎、酒本勇太 撮影協力：鳥取大学ワークショップ入門受講者 デザイン：石原達也

お問合せ：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター URL <http://tottori-katsu.net/>

〒682-0023 倉吉市山根 557-1 パープルタウン 2 階 TEL 0858-24-6460 FAX 0858-24-6470 E-mail info@tottori-katsu.net



読者アンケート
にご協力ください。



「いまこれ」
バックナンバー
はこちらから。